

W. レプケの秩序政策構想：社会学的新自由主義の理論的・思想的背景を中心に

| | |
|-----|---|
| 著者 | 村上 寿来 |
| 雑誌名 | 名古屋学院大学論集 社会科学篇 |
| 巻号 | 51 |
| 号 | 4 |
| ページ | 239-265 |
| 発行年 | 2015-03-31 |
| URL | http://doi.org/10.15012/00000101 |

〔論文〕

W. レプケの秩序政策構想

——社会学的な新自由主義の理論的・思想的背景を中心に——*

村上 寿来

名古屋学院大学経済学部

要 旨

W. レプケは、新自由主義を代表する経済学者の一人であるが、「社会学的な新自由主義」と位置付けられるように、彼が「社会学的・文化的問題」とする「現代社会の危機」についての広範な議論を背景に、「総合社会政策」を含んだ秩序政策構想を展開していた点で、他の新自由主義とは根本的に異なる思想を展開している。その相違は、彼が「経済ヒューマンイズム」という自らの基本思想の基礎に置いた人間観、社会観に由来する。本稿では、「マス化」と「プロレタリア化」によって規定された現代の社会危機についてのレプケの議論を整理するとともに、彼の人間観と社会観の基礎にあるキリスト教的基盤についても明らかにする。さらに、それらを基礎に展開された彼の「第三の道」の秩序政策構想を検討しながら、その現代的意義を明らかにすることを旨とする。

キーワード：W. レプケ、社会学的な新自由主義、経済ヒューマンイズム

W. Röpkes Ordnungspolitische Konzeption

——Zur theoretischen Grundlagen von soziologischen Neoliberalismus——

Toshiki MURAKAMI

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

* 本研究はJSPS 科研費25380250の助成を受けたものです。

1. はじめに

ヴィルヘルム・レプケ (Wilhelm Röpke 1899-1966) は、第二次世界大戦以前から、反ナチ、反全体主義、自由主義擁護の論陣を張っており、戦後における自由主義の復興にも大きな影響を及ぼしたところから、いわゆる新自由主義 (Neoliberalismus) といわれる潮流全体においても代表的人物の一人に位置付けられている¹⁾。わが国においても、その著書が多数翻訳されており、比較的良好に知られているといえる²⁾。彼の名声は、「自由主義インター」ともいわれた「モンペラン協会」(Mont Pelerin Society) において、初代会長ハイエク (Friedrich Augst von Hayek) に続いて、第二代会長を勤めているところからも明らかであろう³⁾。

だが、レプケは、その新自由主義の中でもリュストウ (Alexander Rüstow) やミュラー＝アルマック (Alfred Müller-Armack) とともに「社会学的新自由主義」(soziologischer Neoliberalismus) に位置付けられる⁴⁾。そもそもこの「社会学的新自由主義」という特徴付け自体、彼が自己の立場を「社会学的自由主義」(soziologischer Liberalismus) としたことに由来している⁵⁾。レプケはこの概念をそもそも19世紀の旧自由主義に対する「社会学の盲目性」(soziologische Blindheit)⁶⁾ という批判から、それと自らの立場を区別する意味で用いているが、レプケの立場は、戦後の新自由主義の主流とも明らかに一線を画する側面をもっている。

次の事実はそのことを象徴している。既に述べたように、レプケはモンペラン協会の会長を勤めたが、しかし彼は、他の代表的な新自由主義のグループ、いわゆる「オーストリー学派」や「シカゴ学派」との対立から、会長を辞するとともに、他の学者、とりわけリュストウとともに1961年に協会を脱退している⁷⁾。そのきっかけは会の運営上の対立であったが、その対立の根本的なところでは明らかに、他の新自由主義との基本的な立場の違いが存在しているといえてよい。とりわけ重大な違いは、レプケが必要不可欠なものとして自らの政策体系に加えた、総合社会政策 (Gesellschaftspolitik) に対する立場である。ミュラー＝アルマックは、後に次のように振り

-
- 1) レプケの経歴については、Vgl. Hunold (1964, 329-354), Haselbach (1991, 162-173). 邦語文献では藤本 (2008) が伝記的アプローチでもって詳細にレプケの人と業績を検討している。
 - 2) わが国では多くの著作が訳されている。松野訳(1939), 有井訳(1944), 喜多村訳(1949), 喜多村訳(1967), 西村訳 (1974) などがある。
 - 3) 西村 (1967, 6)。それどころかレプケは、この協会の設立にも大きな役割を果たしている。モンペラン協会については、Vgl. Hartwell (1995).
 - 4) この分類はベッカーに拠っている。Vgl. Becker (1965, 44ff). また、村上 (2013) も参照。
 - 5) Vgl. Röpke (1944/1979, 51; 91f)
 - 6) 旧自由主義へのこの「社会学の盲目性」という批判については、リュストウがより詳細に論じている。Vgl. Rüstow (1950, 50-56). また、村上 (1998) も参照。
 - 7) Vgl. Schmölders (1971, 491). 西村光夫も、1965年のモンペラン協会の総会には既にレプケはおらず、幹部間にトラブルがあったときいた、としている (西村, 1974, 6)。ハートウィルによれば、これはフーノルドの個人的態度に起因するアメリカ系とドイツ系との路線対立である。Vgl. Hartwell (1995, 100-133).

返っている。「レプケやリュストウや私が目指したこと、とりわけ社会政策、Vitalpolitik、総合社会政策をもち出す試みは、あからさまな抵抗とはいわないまでも、ほとんど反響を見出さなかった」⁸⁾。レプケやミュラー＝アルマックの問題意識からすれば、経済社会秩序においては、市場経済だけでは決して十分ではなく、安定した社会秩序をもたらす「反対から支えになる総合社会政策」(widergelagerte Gesellschaftspolitik)⁹⁾がなくてはならないものであり、この点はやはり新自由主義の主流派との決定的な違いとなっていると思われる。

レプケは、他の社会学的新自由主義者と同様に、「社会学的・文化的問題」(soziologisch-kulturelle Frage)といわれる諸問題へと大きな関心を持ち¹⁰⁾、自ら、「現代の社会危機」についての分析を加えている。したがって、議論の幅は、明らかに専門的経済学者の範囲を大きく超えていく。彼は確かに、自由主義者として、経済秩序においては市場経済秩序を強く支持し、集産主義(Kollektivismus)的な秩序を根本的に拒絶する¹¹⁾。しかしながら、レプケによれば、近代の危機はまさに社会危機(Gesellschaftskrisis)であり、それは決して市場経済秩序だけでは回避されえない。危機の克服には、市場経済秩序を取り囲んでいる「社会学的・人間学的枠組み」(soziologisch-anthropologischer Rahmen)の安定を目指す、「総合社会政策」が不可欠となるのである。レプケにおいては、市場経済は「必要条件であるが十分条件ではなく」¹²⁾、むしろ「需要と供給の彼方」(Jenseits von Angebot und Nachfrage)こそが重要なのである¹³⁾。こうした彼の立場をレプケは「経済ヒューマニズム」(Wirtschaftshumanismus)¹⁴⁾としており、その思想は、他の社会学的新自由主義者にも大きく影響を及ぼし、この流れの共通の基盤の一つにもなっている。

以下においては、こうした特徴を持つレプケの社会学的新自由主義の秩序政策構想ならびにその構想の背景についてより詳細に検討するが¹⁵⁾、その際、彼の社会学的・文化的議論に注目するとともに、構想の思想的背景となる「経済ヒューマニズム」の理念を、それを基礎づける人間観や社会観に遡って明らかにしたい。

なお、ここでわれわれがレプケに関心を向けるのも、彼の構想が、社会学的新自由主義の重要な柱を形成するとともに、それがまさに、時代の転換期にある現代において、新たな経済社会体制構想の展開に対して、他の新自由主義にもまして豊かな基礎を提供しうると考えるからに他ならない。

8) Müller-Armack (1971, 45). ミュラー＝アルマックは、協会における「アングロサクソンの気質の支配」について語っている。

9) Röpke (1944/1979, 85).

10) Vgl. Becker (1965, 169-172).

11) たとえば、Vgl. Röpke (1944/1974, 47ff).

12) Röpke (1960, 74).

13) Vgl. Röpke (1958/1979)

14) Röpke (1958/1979, 31; 79).

15) とりわけ平田 (1994), 平田 (1995), 福田 (2000) を参照。

2. レプケの問題意識—現代の社会危機

2.1 経済学者から社会理論家へ

レプケは、マールブルク大学において、歴史学派に位置付けられるヴァルター・トレルチ (Walter Troeltsch) のもとで経済学を学び¹⁶⁾、景気循環理論、景気政策論の専門家として出発した。彼はかなり若い頃から才能ある経済学者として注目を浴びており、1922年には帝国経済省の賠償問題に関する委員会に招聘され、また当時帝国最年少で正教授のポストについている。早くから専門的経済学者として才能を開花させていたレプケではあったが、しかしながら、次第に専門的な経済学者の枠を越えて、社会学的・人間学的・倫理的な領域へと自己の議論の範囲を展開していくことになる。それには、レプケが当時置かれたさまざまな状況がかかわっている。

まず一つには、当時の時代状況がある。1917年のロシア革命、1929年の世界恐慌に始まる経済的混乱と集産主義化、それをきっかけにした政治的な混乱のまさに真只中にレプケは置かれていた。とりわけ注目すべきは、レプケとナチスの関係である。レプケは非常に早い段階からナチスに対して強い反対を示しているが、その対立のきっかけは、レプケの用語で「起爆」(Initialzündung) と呼ばれる、いわゆる呼び水政策による積極的な景気政策を主張したレプケの景気政策論を、親ナチスの論者がナチスの経済政策の正当化に利用したことに端を発しているようである¹⁷⁾。そのように自説を利用され、それをもとに誤った論説を流布されたことに対する責任感からか、レプケは早くから反ナチスの論陣を張っており¹⁸⁾、そうした態度からレプケはナチスが政権をとるや真っ先に公職追放にあうことになる。それゆえ、結局彼はトルコ、そしてスイスへと亡命せざるを得なかった。こうして個人的に困難な状況へと追い込まれていったのと同時に、結局は自らの抵抗も空しく時代の空気が全体主義へと向かっていく中で、近代においてこれ

16) トレルチについては、藤本 (2008, 44-47) において経歴が詳しく述べられている。レプケが市場経済秩序の強い支持者である一方で、単なる市場原理主義者でなく、総合社会政策の必要性を受け入れるようになったのは、歴史学派に属した師トレルチからの影響もあると考えられる。この点については、Vgl. Quaas (2000, 269f).

17) こうした経緯については Vgl. Haselbach (1991, 164ff). たとえば河合俊三が戦中にレプケをナチスの御用学者と誤解していたのもこうした事情からであると思われる (河合, 1974, 308)。レプケの景気理論については、Vgl. Röpke (1932)。また、藤本 (2008, 55-66) が概要を詳しく取り上げている。なお、海外への亡命後に出した英語版は原本にレプケ自ら大幅に修正を加えたものであり、内容的にはドイツ語原本より詳しいものになっている。

18) レプケは、1930年の総選挙の前に、新聞紙上で、ナチスに投票する者は「秩序ではなくカオスを、建設ではなく破壊を」選択しているとして反ナチスを呼びかけている。Vgl. Röpke (1959, 84ff)。またレプケは、雑誌『タート』(Tat) の親ナチスの論者フェルデナント・フリート (Feldinand Fried=平和という意味) に対抗して、自由主義的な新聞「フランクフルト新聞」(Frankfurter Zeitung) で、ウルリッヒ・ウンフリート (Ulrich Unfried=不和という意味) というペンネームでナチスに反対の論陣を張っていた。Vgl. Röpke (1959, 87-107)。

まで展開されてきた時代の流れそのものに対する問題意識が生まれていったと考えられる¹⁹⁾。

もう一つ重要なのが、リュストウとの出会いである²⁰⁾。レプケよりも10年以上年長で、哲学や社会学に造詣の深いリュストウとの個人的つながりは、レプケの議論に多大な影響を与えているといえる。とりわけ、トルコでの亡命時代に密接な交流を持つなかで、後のレプケの社会批判的議論につながる構想を深めるのに、リュストウの文化社会学の議論が大きく摂取されている。密接な個人的関係を持つ中で、両者は学問的にもはっきりと共同戦線を取っていくようになっていったのである。このようにリュストウの影響のもとで、レプケの社会学的・文化的な問題意識はより一層大きなものになっていったと考えられる。

それ以外にもさまざまな要因が考えられようが、こうして次第にレプケは、時代診断的問題意識を強め、さまざまな議論を取り入れながら、「現代の社会危機」について分析を展開していくようになった。

2.2 現代の社会危機—マス化・プロレタリア化・集中化

では、レプケはいかなる診断を下したのか。レプケは、ミュラー＝アルマックの世俗化理論²¹⁾やリュストウの重層化理論と統合理論²²⁾のように、独自に分析理論を構築した上で診断を行なっているというわけではない。しかしながら、さまざまな理論を摂取し、総合した上で、極めて包括的で豊かな議論を展開している。

レプケは現代の社会は疾病状態にあるとみなす。その原因、そして現象形態として、レプケが最も注目するのは、「マス化」(Vermassung)である。レプケはこのマス化が進行した現代の社会を「大衆社会」(Massengesellschaft)と位置付け、マス化現象を中心に社会の状態を分析して

19) それを物語っているのが、1933年、ナチスの政権掌握直後に行なわれた講演『時代の転換?』である。レプケはこの講演において彼の学問的経歴においておそらくはじめて時代診断へと議論の領域を展開している。Vgl. Röpke (1933, 105-124).

20) リュストウとレプケが交流を持つようになったのは、ハーゼルバッハによれば、遅くともリュストウがVDMA (Verein Deutscher Maschinenbau-Anstalten; ドイツ機械工業団体)の幹部として活動していた1920年代後半である。レプケやオイケン、VDMAの発行する雑誌『機械工業』(Maschinenbau)に1928年に論文を寄稿しており、また当時のリュストウは団体活動の戦略として、若手の学者との密接なコンタクトをとっていたことから、この時期であると推測している。Vgl. Haselbach (1991, 203). レプケ自身は、最初にリュストウの存在を知ったのは1923年、実際に会ったのは1924年だとしている。Vgl. Röpke (1955, 13f). したがって、両者の密接な関係は既に亡命以前に存在していたと考えられる。事実、ハーゼルバッハによれば、それまで学者としての明確で十分な経歴のないリュストウが、亡命してイスタンブール大学へと職を得ることは出来たのは、レプケがイスタンブール大学への招聘を受ける条件としてリュストウに席を設けることを挙げたからであった。Vgl. Haselbach (1991, 208).

21) ミュラー＝アルマックの世俗化理論については、Vgl. Müller-Armack (1948/1981). また村上 (2001a) も参照。

22) リュストウの重層化理論および統合理論については、Vgl. Rüstow (1950b). また、村上 (2001b) も参照。

いく²³⁾。レプケによれば、健全な社会は、「多くの中間構造をもった、真の『構造』」²⁴⁾をもっており、それは水平的構造と垂直的構造をもつ「三次元的」な、「ヒエラルヒー」的な構造を示している²⁵⁾。そのような社会構造のなかで、諸個人は共同体の中に埋め込まれており、社会にしっかりと根を張りながら、自らの社会に占める位置をそれぞれが知っている。しかしながら、近代に至ってそうした社会構造は次第に崩れていった。レプケによれば、「マス化」とは、このような社会の「三次元的構造の崩壊」であり、「あらゆる真の共同体の解体の進行」²⁶⁾である。したがって、レプケの「マス化」論は、とりわけ「社会構造を崩壊させる粉碎過程ならびに破壊過程」²⁷⁾によって特徴付けられる。マス化の進行によって人々は「抽象的な個人の塊」²⁸⁾、すなわち「マス」(Masse)になってしまう。その結果、個人は「家族、職業、近隣社会、自然、そして共同体の紐帯」から解放されていくと同時に、「カオス的関係喪失状態」(chaotische Beziehungslosigkeit)に陥り、もはや「社会においてどこに属しているのか、どのような地位にあるのかわからな」くってしまうのである²⁹⁾。

このようなマス化の影響は、文化的あるいは精神的・道徳的側面へと及ぶ。マス化による共同体、そしてとりわけ「基幹家族」(Stammfamilie)の解体は、それらの担っていた伝統的な価値の伝達機能や教育機能を失わせ、そのことは結果として精神的・道徳的価値基盤の解消をもたらすことになる³⁰⁾。共同体への埋め込み、世代間のつながりの感覚、歴史的意識を喪失し、大衆はますます精神的な「根無し草」(Wurzellosigkeit)になっていく。基準をなくし、「自分だけを頼りとして生きなければならなくなった個人」³¹⁾は、「道徳的に難破」し、「宗教的信仰へと献身する能力」や「伝統的文化価値の育成能力」を失う³²⁾。こうした精神的・道徳的な側面への影響は、「(思考の)平板化、均等化、独自性の喪失、群盲性(Herdenhaftigkeit)ならびに平均性、半可通の支配の拡大、……文化ピラミッドの粉碎」³³⁾といった事態をもたらし、そしてなにより、「ヨーロッパ的・キリスト教的文化の支柱的理念ならびに価値」³⁴⁾を失わせることになるのである。こ

23) レプケのマス化の議論は、オルテガ(Ortega y Gasset)に決定的な影響を受けている。既に1933年の最初の時代診断的議論の時点から、オルテガの大衆社会論が取り入れられている。Vgl. Röpke (1933, 122ff)。レプケのマス化論、大衆社会論については、Röpke (1957), Röpke (1958/1979, 64-144)。オルテガの大衆社会論については、Vgl. Ortega (1952)。

24) Röpke (1942/1979, 23).

25) Röpke (1944/1979, 243ff).

26) Röpke (1944/1979, 245).

27) Röpke (1942/1979, 23).

28) Röpke (1942/1979, 23)

29) 以上については、Röpke (1944/1979, 243).

30) Vgl. Röpke (1944/1979, 210ff; 244f).

31) Röpke (1944/1979, 243)

32) Röpke (1958/1979, 30).

33) Röpke (1958/1979, 85).

34) Röpke (1958/1979, 86).

うして次第に文化的価値が侵食されるようになると、「真の精神的指導を行なう資格をもたないような人間による、国家、文化ならびに社会の支配」³⁵⁾が生まれ、文化的水準の平板化とともに「精神的ヒエラルヒー」³⁶⁾は崩壊することになる。

このように社会にさまざまな面で深刻な影響を及ぼすマス化と密接に結びつく、その特殊な側面が、「プロレタリア化」(Proletarisierung)³⁷⁾である。近代における工業化の発達、大都市化の進行は、プロレタリアと呼ばれる階層を生み出した。が、ここでプロレタリア化とは、人々が単に労働者階級になることを意味するのではなく、極めて包括的な意味で用いられている。レプケによれば、プロレタリアとは「経済的ならびに社会学的蓄え」(wirtschaftliche und soziologische Reserven)と特徴付けられる存在の支えを本質的に奪われた存在である。すなわち、「所有を持たず、一定の独立性を与えられる……貯蓄もなく、家族や近隣社会や仕事仲間や理念上の同志の連帯性がもたらす、経済的あるいは道徳的な支えもない」、「根の喪失」した状態である³⁸⁾。

社会のプロレタリア化が進行するにつれて、大衆の広範な層は財産(Eigentum)という「人間に本質的な、必要なカテゴリー」を失っていく。それによって、プロレタリアは、「全存在の独立性ならびに自律性、家、所有、環境、家族、職業へと根をおろすこと、労働の人格的な関係、伝統」³⁹⁾を奪われてしまう。そのような状態から、プロレタリアは、短期的な所得に依存した生活の断続性(Diskontinuität)、従属的な社会的・経済的地位に置かれることによる他者法則性(Fremdgesetzlichkeit)、そして、自然的ならびに社会的埋め込みから解放され、自己の生活の基準ならびに規範を失うことによる生活の任意性(Beliebigkeit)といった特徴を示すようになる。さらには、そうした点からくる、従来通りにやっていくという根拠のある希望の本質的な不在(wesentliche Abwesenheit)、ならびに単なる稼得手段以上の労働の究竟性(Finalität der Arbeit)の欠如といった特徴をもつ⁴⁰⁾。こうした「一般的な反生命化(Devitalisierung)ならびに反人格化(Depersonalisierung)」を意味する「生の虚弱形態」(Kümmerform des Lebens)⁴¹⁾こそが、プロレタリア化の帰結であり、それは、レプケによれば、「社会学的ならびに人間学的に危険な状態」⁴²⁾に他ならないのである。

以上のような特徴をもったマス化、プロレタリア化が進むことによってもたらされた「共同体および自然からの疎外」や自律性の基盤の欠如によって、レプケによれば、近代のマスやプロレタリアには、自然的な統合や根を持つ(Verwurzelung)という人間の性質に不可欠なものが欠如しており、その状態は人間の本質に矛盾している。それによって人間は内的な空虚さを感じざる

35) Röpke (1942/1979, 24).

36) Röpke (1942/1979, 25).

37) プロレタリア化については、Vgl. Röpke (1950/1964, 160-175)

38) Röpke (1950/1964, 162f).

39) 以上は、Röpke (1944/1979, 254).

40) Vgl. Röpke (1950/1964, 163).

41) Röpke (1950/1964, 163)

42) Röpke (1944/1979, 254).

をえず、それゆえ「埋め込み (Einbettung) と統合への渴望」が生じる⁴³⁾。そうした渴望を満たすために、現代において現れたのが「市場、競争、中央組織、外的な押し込み、投票用紙、警察、法、大衆供給、大衆娯楽、大衆感情、大衆教育」といった「偽の統合」(Pseudintegration)である⁴⁴⁾。これらはしかし「真の統合」ではないため、その渴望を潤すことは出来ない。それゆえ人々は焦燥感、不安感に襲われ、ますます何かに統合されることを求める。こうして生まれたナショナリズムやイデオロギー、神話、あるいは「社会宗教」(Sozialreligion)⁴⁵⁾を求める傾向は、人々を容易に集産主義 (Kollektivismus) へと向かわしめることになる。人々は、安易な統合を求め、自立心、自己責任感を喪失し、困窮に陥るや否やすぐさま国家に助けを求める。それにより、ますますあらゆる面での集中化 (Zentralisation) が進行していき、ついには、それは集産主義、そして全体主義へと導くことになるのである。ナチズム、共産主義といった全体主義の出現は、マス化、プロレタリア化によって容易に招かれたものであると同時に、他方で全体主義は、マス化、プロレタリア化を促進することによってその存立の基盤が最も安定するがゆえに、それらを一層推し進めることになる。かくして、現代の社会危機は、マス化、プロレタリア化から、集産主義へと導くことによって最も深刻な形で現れることになるのである。

2.3 近代の社会的・文化的危機の根本原因

レプケにおいては、マス化、プロレタリア化は現代の社会が危機的状況にある本質的な原因であるが、その現象形態でもある。それらはさらにさまざまな要因から発生し、他方でまたそれらの要因を促進していることになる。レプケは、極めて多様な要因を指摘しているが、主な要因として人口学的要因、技術的要因、政治的・社会的・制度的要因を挙げている。

人口学的要因とは、近代において生じた、爆発的な人口増加である。死亡率の低下と出生率の上昇による人口増加は、人類史上かつてない規模で進んだ。この人間の量的な増大は、経済的、社会的、文化的緊張を生まざるを得ず、現代を大衆社会へと推し進めざるを得なかった⁴⁶⁾。

技術的要因とは、近代における技術進歩である。近代における技術発展が人口増加を可能にすると同時に、他方またその人口を維持するためにさらなる技術の進歩が推し進められる。技術進歩は大規模な工業組織の技術、とりわけ産業革命以降の経済的発展を実現し、大量供給機構を可能にした。それによって生み出された、巨大企業、大規模生産様式は、工業都市の拡大、大都市集中をもたらした。それによって農村の衰退がもたらされると同時に、プロレタリアートを生み出し、彼らに非人間的な生活形態を押し付けることになったのである⁴⁷⁾。

それらも含めて、いわば政治的・社会的・制度的要因が、さらに一層マス化、プロレタリア化を推し進めることになる。とりわけ、国家によるさまざまな施策が、大規模経営を優遇し、都市

43) Vgl. Röpke (1944/1979, 248f).

44) Röpke (1942/1979 24).

45) この用語はアルフレート・ヴェーバー (Alfred Weber) のものである。Vgl. Weber (1953)

46) Vgl. Röpke (1942/1979 28), Röpke (1944/1979, 257f).

47) Vgl. Röpke (1944/1979, 252ff).

化を促進するとともに、農村の衰退に作用することで、大きな影響を及ぼしたといえる。また国家による大衆扶助の制度は、人々の自律性に反作用をもたらすことでマス化、プロレタリア化に促進的に作用する⁴⁸⁾。

しかし、近代の社会危機をもたらしたのはこうした外的な社会的要因だけではない。レプケがそれらを惹き起こしたさらに深い原因として挙げるのが、精神史的要因である。彼はそれを主に近代「合理主義」(Rationalismus)に求める。レプケによれば、近代において合理主義が誤った道(Irrwege)を進んだことが、現代の社会危機の重大な原因なのである。

レプケは、合理主義そのものは、決して近代に限られるものではないと考える。むしろ、彼によれば、合理主義は西洋文化の本質的要素に入れられるものである。ヨーロッパ文化は古典古代とキリスト教に源流を持つ。「一般的な人間理性(allgemeine-menschliche Vernunft)、個々の魂の絶対性を基礎に置いた人間の尊厳、人間の恣意の彼方にある理念の王国の存在、……自然的秩序の不可侵性」といった古代からの思想は、「本質的にキリスト教的な精神」(animae naturaliter Christianae)であり、それは「キリスト教自然法」(das christliche Naturrecht)へとつながり、ヨーロッパ文化の基礎を作った⁴⁹⁾。レプケはこのヨーロッパ文化の伝統を「永遠不滅の自由主義」(unvergänglicher Liberalismus)⁵⁰⁾と呼ぶが、このヨーロッパ文化の理念世界においてはある種の「弁証法的過程」(dialektische Prozeß)が存在し、理性(Ratio)へとアピールして、人間を拘束から解放し、自律性を確立しようとする力が働いている。それはキリスト教自然法によってある程度抑えられていたが、宗教改革を経てキリスト教自然法の力が弱まると近代においてますますその力が解放されるようになっていった⁵¹⁾。

その合理主義の解放過程は、近世絶対主義における神の世界秩序の絶対化、ならびに王権神授説による世俗権力の絶対化という、過剰に行き過ぎた専制に対する反動として、ますます加速された⁵²⁾。そしてフランス革命から始まる政治革命、ならびに産業革命から始まる経済革命(資本主義)という歴史的契機を経て⁵³⁾、レプケによれば、合理主義は「理性の思い上がり」(Hybris der Vernunft)⁵⁴⁾といえるような段階にまで行き過ぎてしまったというのである。

この近代合理主義は、人間の理性に絶対的な信頼を置く。それによって、理性の利用に対しての何の制約もなくなり、理性を持った人間こそが神に代わって絶対の基準となる人間の「自己神格化」(Selbstvergottung)⁵⁵⁾が行なわれる。そこから人間は有限的な現実の世界における「無条件的なるものならびに絶対的なるものへのはまり込み」(Verrantheit ins Unbedingtheit und

48) Vgl. Röpke (1944/1979, 255ff), Röpke (1942/1979 29).

49) Vgl. Röpke (1947, 15).

50) Röpke (1947, 11).

51) Röpke (1947, 13f).

52) Vgl. Röpke (1944/1979, 112ff).

53) Röpke (1942/1979, 65ff).

54) Röpke (1944/1979, 107).

55) Röpke (1950/1964, 58).

Absolute)⁵⁶⁾ というべき状態へと陥らざるをえない。が、それは認識の「謙虚さ」(Humilitas)⁵⁷⁾ を欠いているにすぎず、多くの重要なこと、とりわけ、計測できないもの (Inponderabilien) を無視することになる。このような社会学的盲目性 (Soziologieblindheit)⁵⁸⁾ から、「頭の中で作り上げる (geistiges Konstruieren) 傾向、単純化、無頓着なラディカリズム、型に当てはめる傾向」が生じ、そこからさらに「原則的な新しいものの愛好と古いものの嫌悪、伝統、生成的なもの、ならびに自生的なものの軽視、組織的なものと機械的なもののひいき」といった態度が生まれる。こうした傾向は、社会科学、精神科学における実証主義 (Positivismus) として表れ、デカルトにまで遡る「量的・数学的・自然科学的思考」⁵⁹⁾ によって精神生活や社会生活を支配しようとする「科学主義」(Szientismus) へと向かっていく。そこでは精神的・道徳的存在としての人間も、「人間的・社会的な価値、問題、ならびに連関」といった「微妙で質的な」ものも、厳密でないものとして排除されてしまう。それは一方では、社会を個人に分解してしまう「原子論的社会観」や、社会を合理的・機械的に形成しようとする「永遠なるサン・シモニズム」(ewiger Saint-Simonismus)⁶⁰⁾、技術主義 (Technismus)、そして集産主義へと行き着き⁶¹⁾、他方においては、精神科学的な形において、価値相対主義 (Wertrelativismus)、批判主義 (Kritizismus)、懐疑主義 (Skeptizismus)、価値の解消 (Wertauflösung)、そして価値ならびに認識ニヒリズム (Wert- und Erkenntnisnihilismus) へと向かっていくことになるのである⁶²⁾。

こうして、近代における合理主義の展開は、あらゆる伝統的な価値ならびに規範の解体と崩壊、つまりは「文化的な蓄えの消尽」(kulturelle Reservenverzehr) を惹き起こさざるを得ない⁶³⁾。ここでそのような「蓄え」とは、既に述べたように、「古典古代とキリスト教の遺産」として受け継がれたものである。この遺産においてとりわけ支配的な、キリスト教的要素は、合理主義の展開に平行する形で、近代における「世俗化過程」(Verweltlichungsprozess)⁶⁴⁾ のなかにおかれている。それによってますます信仰ならびに確信の力が衰退していくことを通じて惹き起こされた、「自然的な本能の確実性」(natürliche Instinktsicherheit) ならびに「人間の本質に則したもののコンパス」(Kompaß des menschlich Wesensgemäßen)⁶⁵⁾ の喪失は、「精神的・道徳的真空状

56) Röpke (1942/1979, 83).

57) Röpke (1944/1979, 107).

58) Röpke (1944/1979, 108). レプケはそれ以外にも生に対する盲目性 (Lebensblindheit)、歴史に対する盲目性 (Geschichtsblindheit) といった表現を用いている。社会学的盲目性は、リュストウによる経済的自由主義批判の核心でもある。Vgl. Rüstow (1950a, 50-56). レプケの場合は、より広く「合理主義」に対して批判が向けられている点が特徴的である。

59) Röpke (1942/1979, 84)

60) Röpke (1944/1979, 133ff).

61) Vgl. Röpke (1944/1979, 121f).

62) Vgl. Röpke (1944/1979, 139f).

63) Röpke (1942/1979, 17).

64) Röpke (1942/1979, 18).

65) Röpke (1942/1979, 19).

態」(geistig-moralisches Vakuum)を生み出した。このように世俗化の進行した現代は、基準を失った「精神的空位時代」(geistige Interregnum)⁶⁶⁾として特徴付けられるのであり、それこそが現代の社会危機の極めて深刻な原因として指摘され得るのである。「われわれの文化の病気の最も深いところにあるのは、精神的・宗教的危機である……。人間とはとりわけ宗教人(homo religiosus)であるにもかかわらず、われわれは、この一世紀以来、神なしで済まし、人間、その科学、その技術、その国家を、神からはなれて、まさに神を失って、自己支配的に神の位置に置くという、ますます絶望的な試みを行なっている」⁶⁷⁾。レプケにおいても、ミュラー＝アルマックと同様に⁶⁸⁾、世俗化によって惹き起こされた道徳的・精神的価値基盤としてのキリスト教文化の衰退こそが、根本的な原因として現代の社会危機を惹き起こしていると考えられているのである。

3. 経済ヒューマンイズムの理念

以上のように、広範にわたる包括的な診断を通して、レプケは現代の社会危機を分析する。では、こうした危機的状态に陥った現代において、危機を脱するにはいかにすればよいのか。レプケは、こうした診断を基礎にして、危機の克服に向けた経済ならびに社会改革の構想を展開する。その際、その改革の基礎に置かれるのが、レプケのいう「経済ヒューマンイズム」の理念である。が、レプケ自身は、この経済ヒューマンイズムの理念について、詳しく説明を加えているわけではない。これは彼の提案する新たな経済社会構想の基本方向に対して与えた一つの表現であるにすぎない。したがって、これについては、彼の所説をもとにして内容をある程度明確にする作業が必要になってくる。

多くの論者が一致しているのは、レプケ自身の言葉ではないが、1962年に彼が「ヴィルリバルト・ピルクハイマー・メダル」(Willibald-Pirkheimer-Medaille)を授与されたときに送られ

66) Röpke (1942/1979, 17).

67) Röpke (1958/1979, 25).

68) ミュラー＝アルマックについては、村上(2001a)を参照。レプケにおいては、マス化、プロレタリア化といった社会的現象形態についての分析が主に詳細に展開されており、世俗化過程のような「道徳的側面」に関しては、十分に意識されてはいたものの、当初は比較的扱いが小さかった。というのも、レプケは、「道徳的側面」は「制度的側面」と同じく重要であり、当然ながら両者は統一として取り扱われなければならないと認めるが、社会学者である彼は、いわば「学問的分業」として「制度的なもの」に議論を集中するとしていたからである。この点については、Vgl. Röpke (1944/1979, 27ff). それゆえ、ミュラー＝アルマックは、レプケの三部作への書評において、レプケの現代の社会危機に関する診断を高く評価する一方で、「制度的」な側面に集中したレプケの分析がやはり「精神的・道徳的側面」についての分析によって補完されなければならないということを強調している。Vgl. Müller-Armack (1950, 256ff). そうしたミュラー＝アルマックからのコメントを受け入れたからであるかどうかは定かではないが、レプケは、後に次第に世俗化による宗教的な諸力の衰退をより強調するようになっていったということが指摘され得るだろう。たとえば、Vgl. Röpke (1958/1979).

た賛辞における、次のような表現が、レプケの基本的立場を適切に表しているということである⁶⁹⁾。すなわち、「経済の基準は人間である。人間の基準はその神との関係にある」⁷⁰⁾ というものである。この表現は、まさにレプケの「経済ヒューマンイズム」の理念をも適切に示しているといつてよいかもしれない。しかしながら、やはりこの短い定式だけでは、まだ十分な内容が明らかになってはいない。これを明らかにするために、まずはレプケの人間観、社会観を見る必要があるだろう。

3.1 レプケの人間観、社会観

レプケは、自己の人間観を体系立てて展開してはいない⁷¹⁾。が、さまざまな箇所では自己の考え方を明らかにしている。とりわけ、レプケははっきりと自己の構想においては「古典古代・キリスト教的伝統の精神的遺産によって形作られたある人間像」⁷²⁾が立てられることを表明している。それによれば、まずもって人間とは「神の似姿」(Das Ebenbild Gottes)⁷³⁾であり、それゆえに固有の価値と尊厳を持つ。「どの人間の魂も、直接神に向かい、一つの完結した全体として神につながるというキリスト教の教えに従って、個々の人間の人格こそが究極的現実である」⁷⁴⁾。このように、レプケは人間をまずもって「人格」(Person)⁷⁵⁾として規定するのである。この人格としての人間は、それ自体目的として扱わなければならない、「手段へと貶めることはおそるべき罪」となるのであり⁷⁶⁾、こうして「人格」としての人間の尊厳性がまずもって理解されなければならないのである。この意味で、レプケにおける「ヒューマンイズム」は「人格主義的」(personalistisch)⁷⁷⁾であるといえる。

こうした人格としての人間はまた、理性という「天の光の輝き」⁷⁸⁾を与えられることによって、地上における他の動物よりもはるかに高い存在となる。この理性の所有によって、人間は自ら決定をなす自律した存在でありうる。自律した存在が目的たる自己を実現するには、その実存条件としてなにより「自由」という価値が置かれなければならない⁷⁹⁾。

69) たとえば, Tuchtfeldt (1979), Hunold (1964), Starbatty (1988), Ockenfels (1999) などがある。なお, シュタルバッティはこの表現を「レプケの言葉」としているが、誤りである。

70) Vgl. Röpke (1964, 355).

71) このレプケの人間観については, Hotze (2008) が体系的に分析を加えており, さらにリュストウとミュラー＝アルマックについても取り上げ, 彼らの人間像の比較と社会的市場経済構想との関係も議論しているが, 残念ながら紙幅の都合上, 本稿では彼女の成果を十分取り入れることができなかった。

72) Röpke (1958/1979, 21).

73) Röpke (1958/1979, 21)

74) Röpke (1947, 15).

75) Röpke (1962b, 311).

76) Röpke (1962b, 311).

77) Röpke (1947, 15).

78) Röpke (1944/1979, 104).

79) このような人格としての自由については, 野尻 (1983, 26) を参照。

それと同時に、人格としての人間は、自らのうちに根拠を持っているのではなく、「絶対的価値の世界」⁸⁰⁾ とのかかわりにおいてその尊厳を与えられる以上、「価値の序列を承認することによってはじめて真に人間になる」⁸¹⁾ ということになる。それゆえ、一定の価値の序列に従うことが人格として要請される⁸²⁾。「われわれが現世におけるあらゆる外的な利潤、進歩、享樂をわれわれの魂の救済と同等に扱うのみならば……この価値の序列において最下位のものを最上位へと転じることになるだろう」⁸³⁾。レプケにおいては、人間は「宗教人」(homo religiosus)であり、したがって神を最高の価値とした価値の序列の存在が認められなければならない、ここからして経済主義、物質主義に対しては極めて批判的な立場にならざるをえない。

こうして人間は人格としてある一方で、他方だが、レプケによれば、人間は「その本性に従って同時に社会的存在であり、個としてではなく、共同体の中でのみ、そして彼を共同体に結びつける道徳的関係においてのみ、その規定を見出しうるのである」⁸⁴⁾。それゆえ、人間は「自由に浮遊する個体(freischwebendes Individuum)としてではなく、社会的関係においてのみ捉えられる」⁸⁵⁾ ものなのである。こうした確信から、レプケは人間を「社会的存在、社会的団体 (gesellschaftlicher Verband) のために創造された存在、そこにおいてのみ真に満たされる存在」⁸⁶⁾ として規定している。したがって、レプケにおいては、人間はいわば本性からして共同体的存在として捉えられているのである。

レプケの社会観は、このようなキリスト教的人間像によって刻印されている。第一に、このような人間像からして、共同体の形成は人間存在の本質から規定される。それゆえ、既に近代合理主義への批判において指摘したように、レプケにおいては、社会や国家の形成を自然状態からの個人の合理的契約によって形成されたものとして説明しようとする、社会契約説は拒否されることになる。「われわれはルソーには与しない……『社会契約』には与しない」⁸⁷⁾。またこれにかかわって、社会をアトム化された個人の単なる集積として考える原子論的社会観もレプケは否定する。レプケによれば、「社会は一つの全体であり、すべての部分を総計したものと異なる。社会的統合の、すなわちこの諸部分の編成の健全な社会に相応した正常度 (Normalmaß) が存在し、それのみが自由と秩序に均衡をもたらす」⁸⁸⁾ のである。既にマス化の批判から明らかなように、レプケにおいて社会は「質、構造、連続性、形態」⁸⁹⁾ であり、単なる個の集計以上のものとして捉

80) Röpke (1958/1979, 31).

81) Röpke (1962b, 311).

82) この点は次のようにも考えられるであろう。「むしろ本源の拘束のうちに身をおくことによって、人間ははじめて人間となり自由となりうるのである」(野尻, 1983, 100)。

83) Röpke (1962b, 311)

84) Röpke (1962b, 311)

85) Röpke (1959b, 251).

86) Röpke (1959b, 252).

87) Röpke (1947, 19).

88) Röpke (1947, 24).

89) Röpke (1944/1979, 121).

えられているのである。

こうした基本に置かれた人間観，社会観から，レプケの「経済ヒューマニズム」の理念の基礎が理解され得るだろう。ここからまず指摘しておくべきことは，レプケにおいては，「ヒューマニズム」といっても，それは神に代わって人間が支配者となるような，いわば「人間中心主義」ではないということである。レプケは，自らのヒューマニズムを，「(キリスト教の人間像に基づいた，筆者注) 確信へと根をおろしたヒューマニズム」とし，それに対して「誤った，無神論的ヒューマニズム (atheistische Humanismus)」が人間を神へと偶像化することにたいして「思い上がり」として強く批判している⁹⁰⁾。

また，既に見たように，このようなレプケのヒューマニズムにおいて，目指すべき基本的価値としては，なにより「自由」が置かれる。しかしながら，レプケにおいては形式的ないわゆる消極的自由が要求されているのではない。「決定的なのは、『なにかからの自由』ではなく、『なにかへの自由』である」⁹¹⁾。このようないわゆる「積極的自由」の主張からして，より実質的な「人格の自由」の実現が目的とされることになる。とりわけ，レプケにおいては「価値の序列」の承認が積極的に主張されており，これについての人間の自由な判断は容認されない。それは「誤った合理主義」へと向かわしめることになる。むしろ，自ら主体的にそうした価値秩序を承認することが求められるのである。ここでレプケの考える価値秩序は，古典古代ならびにキリスト教から受け継いだヨーロッパの文化の伝統的価値観である。この意味で，レプケの立場は確かに「自由主義」的ではあるが，自ら言っているように，ヨーロッパの伝統を受け継ぐ「永遠不変の自由主義」なのである。したがって，ヨーロッパ文化の伝統的な価値観を守ろうとするという意味で見れば，「保守主義」的立場であるともいえる⁹²⁾。

3.2 経済ヒューマニズムの秩序像

このように，キリスト教社会論がレプケの基本思想の背後において大きな役割を果たしていることは確かであり，彼の「経済ヒューマニズム」の理念においても決定的な影響を与えている。が，しかし，レプケによれば，キリスト教の社会論を硬直したドグマとして捉えてはならない。確かに，人間と社会に関するキリスト教の教説は揺るぎない基盤をもっているが，しかしながら，時代状況と解決されねばならない問題は時とともに変化するものであり，それゆえ，こうした確固たる基盤をもとにして，その時々々の時代状況に照らして判断を下す必要がある。つまり，「確固たるものならびに拘束力あるものを，変化するものならびに拘束されないものと結びつけること」⁹³⁾が必要なのである。したがって，レプケにおける目指すべき秩序像は，決してキリスト教

90) Vgl. Röpke (1958/1979, 21).

91) Röpke (1947, 110).

92) レプケ自身も，自らの構想について「ひょっとしたら自由主義的保守主義 (liberaler Konservatismus) と特徴付けられうるかもしれない」と述べている。Vgl. Röpke (1944/1979, 18).

93) Röpke (1962b, 312).

社会論の展開するものと完全に一致するものではない⁹⁴⁾。レプケは、先に見たような現代の社会危機の分析成果に基づきながら、自らの秩序像を描こうとしている。

では、それはいかなる秩序なのか。レプケはそれを端的に「自然的秩序」(Die natürliche Ordnung) といっている⁹⁵⁾。レプケによれば、ここにいう「自然的秩序」というのは、「自然な、社会学的・生物学的な正しい人間の埋め込みと、うまく秩序づけられ、囲いをめぐらされた市場経済の *ordre naturel* という二重の意味での……自然的秩序」⁹⁶⁾ である。

ここからわかるのは、第一に、経済の自然秩序としては市場経済秩序が考えられるということである。レプケは、オイケンの経済秩序論に依拠しながら、分業の発達した近代における経済システムとしては「市場経済」と「命令経済」(Kommandowirtschaft) の二つの可能性が存在するとする⁹⁷⁾。が、そのうちで経済計算の可能性、業績に対する誘因、そしてなりより自由が可能であることから、市場経済が選択される。しかしながら、それは秩序原則にすぎず、現実には、さまざまな要因が絡み合って歴史状況のもとに経済秩序が形成される。したがって、レプケにおいては、いわゆる「資本主義」といわれる状況は19世紀の歴史的な現象形態にすぎず、「市場経済の必然的な随伴現象」⁹⁸⁾ とはみなされない。むしろそれは市場経済の墮落した形態とみなされ、激しく批判が加えられるべきものである。レプケによれば、市場経済は、それだけでは「必ず腐敗し、その腐敗毒素でもって社会の全体を害する」⁹⁹⁾ ものである。それはいわば「栽培植物」(Kulturpflanze)¹⁰⁰⁾、あるいは「精巧な形成物であり、文明の人工物 (Artefakt der Zivilation)」¹⁰¹⁾ であって、手厚い配慮がなくしては成立し得ないものなのである。それはまた他方で、市場経済とは社会全体の一部の領域での秩序のあり方にすぎず、それに適した場所にとどめなければならないということでもある。それゆえ、市場経済が自然的秩序たるには、「うまく秩序づけられ、囲いをめぐらされ」なければならないのである。

こうして、レプケにおいては「市場経済はすべてではな」く、あくまで「より高次の全体秩序

94) したがって、レプケは、たとえば、カトリック社会論において主張される職能団体秩序については否定的な立場をとる。また、戦後実際にドイツにおいてキリスト教立場の論者の側から主張されたものは、多くは「計画経済」であったことは重要な点である。

95) Vgl. Röpke (1948)

96) Röpke (1948, 232).

97) Vgl. Röpke (1944/1979, 36ff). その他に「自己経済」(Eigenwirtschaft) があるが、小規模の範囲の経済において実現可能であるにすぎないので、一国の経済秩序の可能性からは排除される。なお、オイケンの秩序理論については、Eucken (1940/1989), 村上 (1998) を参照。

98) Röpke (1944/1979, 44).

99) Röpke (1944/1979, 83).

100) 「旧自由主義の見解によれば、競争秩序は自然生成物であるが、われわれ新自由主義の確信によれば、競争秩序は栽培植物である」(zieht von Nell-Breuning, 1953, 218)。ネル・ブロイニクは、レプケがこのたとえをフランクフルトの商工会議所で行なった講演で用いたとしている。

101) Röpke (1944/1979, 75).

に埋め込まれなければならない」¹⁰²⁾ のであるが、他方またそのような市場経済が埋め込まれるべき社会秩序についても、人間の本性に見合った、あるいは社会の本質に適した自然秩序が求められる。レプケは、市場経済のいわば前提条件になる社会に対して、人間像、社会像に照らして、次のようなものを要請する。すなわち、「個人の努力と責任、侵すことの出来ない規範と価値、所有に支えられた独立性、熟慮と勇気、計慮と儉約、自己責任的な生活計画、真の共同体への埋め込み、家族の感覚、伝統に対する感覚と現在と将来に対する展望を開く世代間のつながり、個人と共同体の真の緊張関係、確固たる道徳的拘束、貨幣価値の不可侵性の尊重、勇気、事物の自然的秩序に対する感覚、揺るぎない価値の序列」といったさまざまな要件が満たされるような、「一定の根本的なものごとが尊重され、社会的関係の全体組織に彩りを与える」¹⁰³⁾ 社会である。レプケにおいては、たとえ完全にはなくとも、少なくともこうした特徴が実現可能な社会が求められるのである。これらの特徴が、市場の外において健全な秩序を生み出すのに寄与するとともに、社会をマス化、プロレタリア化といった現代の社会危機の状態とは決定的に異なるものにするのである。そうした条件が可能となるような、より具体的な秩序像として、レプケは、「所有の広範な分散、しっかりとした存在者、人間に抛り所を与える、家族に始まる真の共同体、競争と価格メカニズムへの対重、しっかりとした根を持ち、生活の自然的基盤から引き剥がされていない個人、自律した中産階級の厚い層、都市と農村、工業と農業との健全な関係、その他多くを伴った社会」¹⁰⁴⁾ を描く。レプケはこうした自らの求める社会の秩序を、「プロレタリア化された」社会に対して「ブルジョア的」な秩序としている。現代の社会危機の原因として、レプケは、マス化とプロレタリア化、そして集中化を挙げたが、そうした現代の社会危機を克服した像として、プロレタリアの反対である「ブルジョア的」な秩序を要求するのである。

しかし、既に社会の自然的秩序の要件に関連しているが、外的な形での秩序の実現は、他方でまた精神的・道徳的基盤によって支えられなければならない。既に見たように、現代においては、マス化、プロレタリア化の進行のなかで、ヨーロッパ文化の伝統的文化の遺産は次第に消尽していき、精神的、道徳的価値基盤がますます損なわれていかざるをえない。したがって、そうした「ヨーロッパの文化的蓄えの消尽」を食い止めることが必要なのである。それにはなにより、「キリスト教的・ヒューマニズム的な確信という内的な支えを……再び獲得すること」¹⁰⁵⁾ が必要であり、したがって、キリスト教の倫理の活性化が求められる。その一方で、レプケは、道徳的な模範を示すことのできる一部の人々、すなわち、公共心をもった「自然的貴族」(Nobilitas Naturalis)¹⁰⁶⁾、すなわち、規範ならびに価値を体現し得るエリートが存在に、期待を寄せる。ただし、ここにいるエリートは、社会的地位に由来するのではなく、その精神的態度に由来するものである。それはとりわけ、レプケにおいては自律した中間層であり、彼らが社会の核となり「文

102) Röpke (1958/1979, 23).

103) Röpke (1958/1979, 155).

104) Röpke (1958/1979, 60).

105) Röpke (1958/1979, 31).

106) Röpke (1958/1979, 191).

化ピラミッド」が形成されることが要求されるのである¹⁰⁷⁾。

しかしながら、レプケは決して精神的・道徳的価値基盤の強化のみが重要であるとしているわけではない。むしろ、「制度をなおざりにした上で道徳的・精神的なるものへと集中することは、……非常に危険な一方性を意味する。……道徳的なるものと制度的なるものは従属秩序の関係に置かれているのではなく、互いに、対等の相互作用の関係に置かれている」¹⁰⁸⁾とする。レプケにおいては、どちらか一方に片寄ることは、決して正しい態度とはみなされないのである。「経済学的にディレクタントな道徳主義は、道徳的に鈍感な経済主義と同様にひどいものである。倫理と経済は、同じく難しいテーマである。第一のものは、区別をつける、事実に見合った適切な理性というものを欠くことは出来ず、もう一方は人間的ぬくもりのある価値無くしては語れないのである」¹⁰⁹⁾。この点こそが、レプケにおける「経済ヒューマンイズム」の基本姿勢なのである。

レプケは人間に見合った生活の実現を可能にする社会の自然的秩序と、経済の自然的秩序である秩序付けられた市場経済とのいずれをも実現することを求める。しかしながら、既に見たように、こうした自然的秩序は、近代においては決して自ずと実現するものではない。社会においてはマス化、プロレタリア化が進行し、市場経済秩序は「資本主義」へ墮落せざるを得なかった。それゆえ、レプケにおいては、国家の秩序政策によって積極的にこれらの自然的秩序を実現する努力が必要不可欠になるのである。したがって、以上のような「経済ヒューマンイズム」の理念に合った秩序、経済ならびに社会の自然的秩序を実現すべく、レプケは秩序政策構想を展開するのである。

4. レプケの秩序政策構想—「第三の道」

4.1 レプケの「第三の道」の政策体系

レプケは、自己の秩序政策構想を、リュストウとともに¹¹⁰⁾、「第三の道」(der dritte Weg)¹¹¹⁾という。既に見たように、経済社会の自然秩序として、資本主義も集産主義もいずれも拒否され、それらに鋭い批判を加えた上で、いずれとも異なる新たな構想として自己の秩序政策構想を掲げるのである。レプケは基本的な態度として『「第三」の哲学』(Philosophie des Dritten)¹¹²⁾を主張し、「あれかこれか」(Entweder-Oder)の二者択一的な極端な議論を「絶対的なるものへのはまり込み」として否定する。この「第三の道」の構想については、レプケ自身、彼の構想の基本プログラム

107) Vgl. Röpke (1944/1979, 223f).

108) Röpke (1944/1979, 28).

109) Röpke (1958/1979, 161), Röpke (1957b, 150).

110) リュストウの「第三の道」の議論については村上 (2001b) を参照。

111) レプケは、「第三の道」という表現を、そもそもオッペンハイマー (Franz Oppenheimer) から受け継いでいる。Vgl. Röpke (1942/1979, 314). オッペンハイマーの「第三の道」については、Vgl. Oppenheimer (1933).

112) Röpke (1944/1979, 266).

を整理してまとめているので¹¹³⁾、ここではそれにしたがって、政策構想の全体像を概観してみよう。

レプケは、自らの「経済ヒューマニズム」の立場からする「第三の道」の経済・社会構想の基本プログラムを次のように描いている。

(1) 真の競争秩序の確立

まず、市場経済秩序が選択される以上、それは、墮落した、歪められた市場経済ではない。市場メカニズムが有効に機能するには、まずもってそれは競争秩序でなければならないのである。したがって、「真の競争秩序として市場経済を樹立すること」¹¹⁴⁾が、まずこの基本プログラムの第一に置かれねばならない基本原則となる。

レプケにおいて「競争」とは、抽象的、理論モデル的な厳密に定義される「完全競争」ではなく、より实际的、現実的に「消費者の利益のための生産者の絶え間ない努力」¹¹⁵⁾であり、それに対して、それを阻害し、歪められた市場経済へと向かわしめるのはなにより「独占」である。したがって、まずここで要求されるのは本質的な意味で反独占政策 (Antimonopolpolitik) と特徴付けられる方向であり、独占の存続、管理ではなく、徹底的な除去である。したがって、その際の反独占の基本原則は、濫用阻止原則 (Prinzip der Mißbrauchbekämpfung) ではなく一般禁止原則 (Verbotsprinzip) が要請される¹¹⁶⁾。

(2) 積極的な経済政策 (positive Wirtschaftspolitik)¹¹⁷⁾

市場経済は独占を取り除くだけで満足すべきものが自然に成り立つわけではない。既に述べたように、レプケにおいては市場経済はいわば「栽培植物」であり、それゆえ、手厚い配慮がなくてはうまく生長することは出来ない。すなわち、この点からして、レプケの構想においては「レッセ・フェール」原則が拒否されなければならないのである。したがって、積極的な経済政策的施策によって市場経済秩序を形成維持する努力がさらに必要不可欠なものとしてレプケにおいては取り入れられる。それは大きく二つのものに分けられる。

① 枠政策 (Rahmenpolitik)

まず、市場の枠組みが設定されなければならない。それをレプケは「枠政策」とするが、競争が有効に機能するために必要な競争のルールの設定や監督機関の設置などが含まれる。「うまく考え抜かれた法的・道徳的枠組みと、競争が真の業績競争 (Leistungswettbewerb) として実現される諸条件の絶えざる監視なしには、公正で、機能的な真の競争秩序は成立し得ない」のであ

113) Röpke (1944/1979, 100).

114) Röpke (1944/1979, 74).

115) Röpke (1937/1979, 219).

116) Vgl. Röpke (1944/1979, 74f).

117) Röpke (1944/1979, 76).

る¹¹⁸⁾。このような課題がなされるためには、断固としてこの枠組みを守り抜くことが可能な、強い国家が必要とされる。

②市場政策 (Marktpolitik) —自由主義的干渉 (liberaler Interventionismus)

しかし枠秩序が設定され、監視されるだけでなく、実際にその枠内で行なわれる市場経済の経過にも、一定の国家干渉が必要不可欠な場合があるということをレプケは認める。つまり、市場の自由に対する干渉がある程度容認されるのである。これをレプケは「市場政策」と呼んでいるが、そのようないわゆる経過政策についても、無制限に行なわれれば干渉スパイラルに陥って集産主義へと向かわざるを得ないがゆえに、容認される施策について守られるべき基本原則を掲げる。それを彼はリュストウに倣って「自由主義的干渉」(liberaler Interventionismus)¹¹⁹⁾としているが、それには二つの原則が含まれる。

第一の原則は、適応的干渉 (Anpassungsinterventionen) の原則である。市場の調整過程において、しばしば競争における弱者は深刻な影響を被るケースが存在する。そうした場合に、従来の地位にとどまるように影響を及ぼす維持的干渉 (Erhaltungsinerventionen) は行なってはならず、むしろ調整過程で被る損失やその厳しさを緩和するとともに、それらが新たな地位へと変動することで市場の新たな均衡が達成されることを促進し、容易にするような適応的干渉を行なうことは十分認められ得る。とりわけ、農業、手工業、小企業、労働者ならびに職員といったとりわけ弱い層は、そうした干渉によって援助を行なう必要性が大きいとレプケはみなしている。

第二の原則は、整合的干渉 (Konforme Interventionen) であり、いわゆる市場整合性の原則 (Prinzip der Marktkonformität) を満たすような施策のみが認められなければならない。市場整合的な干渉とは、「価格メカニズムとそれによって作用する市場の自己調整を無効にするのではなく、新たな「与件」として適応される」¹²⁰⁾ 施策であり、それに対して価格メカニズムを麻痺させ集産主義的秩序への移行を惹き起こすような施策は「非整合的」であるとして拒絶されるのである¹²¹⁾。

118) Röpke (1944/1979, 76).

119) 自由主義的干渉については、Rüstow (1932), Rüstow (1963), 村上 (2001b) を参照。

120) Röpke (1942/1979, 259).

121) レプケの整合的経済政策と非整合的経済政策については、Vgl. Röpke (1942/1979, 258-264). レプケにおける整合的干渉と非整合的干渉を、ベールケは次のように整理している。すなわち、整合的干渉は、
 (a) 通過の平価切下げ (Währungsabwertung),
 (b) 保護関税 (Schutzzolle),
 (c) 取引時間に関する規定 (Bestimmungen über Geschäftszeiten) (休日休業を含む),
 (d) 価格の取り決め (Preiregelungen) (基準: 平常価格の創出 (Herstellung des Normalpreises)),
 (e) 金価格の安定化 (Stabilisierung des Goldpreises),
 (f) 配給 (Rationierung) (与件の人為的な変更としての間接的な所得分配と同様),
 (g) (所得課税による) 直接的な所得分配, ならびに最低収入 (Mindesteinkommen) を目指したものではない, 所得助成 (Einkommenszuschüsse)
 であり, 非整合的な干渉は,

以上の二つの原則を基準にして、市場への介入が容認されるが、しかし、レプケによればこれらの原則は干渉の必要条件であって十分条件ではない。すなわち、原則を満たせばあらゆる施策が容認されるというわけではなく、そもそも施策がとられるべきか、そしていかなる施策がとられるべきかは、個々のケースによって判断されざるを得ない¹²²⁾。

(3) 経済的・社会的な構造政策 (Strukturpolitik)

以上に加えて、レプケは、第三に、構造政策といわれる一連の施策を要求する。すなわち、「所得と財産の分配、経営の規模、ならびに都市と農村、工業と農業、階層間の人口分布」といった、「市場経済の社会的な前提条件」¹²³⁾へと加えられる政策である。レプケは、こうした条件がバランスのとれたものである場合にのみ、市場経済は安定して成立し得ると考えており、したがって、これらの条件を与えられたものとして受け取るのではなく、積極的に導こうとするのである。とりわけ、所有の広範な分散、中小企業、手工業、農民といった自律した中産階級の育成、経営規模の縮小、大都市集中の緩和、バランスの取れた都市開発や産業立地といった諸条件を整えることが必要とされる。ここでの課題を、レプケは「国民経済における脱プロレタリア化 (Entproletarisierung) と分散化 (Dezentralisation)」¹²⁴⁾としている。

(4) 総合社会政策 (Gesellschaftspolitik)

以上の三つに加えて、レプケがさらに「最も重要な標柱」(das wichtigste Richtpfahl)¹²⁵⁾として最後に掲げるのが、「総合社会政策」である。「構造政策」が市場経済の社会的な前提条件に向けられた政策であり、あくまで市場経済の安定を目的とした経済的観点からの政策として特徴付けられるのに対し、総合社会政策は、市場経済の「人間学的・社会学的な枠組み」(anthropologisch-

(h) 外国為替の強制的管理 (zwangsbewirtschaftung von Devisen),

(i) 割り当て政策 (Kontingentspolitik) ならびに手形交換政策 (Clearungspolitik)

(j) 投資の禁止 (Verbot von Investitionen)

(k) 家賃ならびに価格の凍結 (Miet- und Preisstop)

(l) 貨幣価値政策 (Geldwertpolitik) ならびに価格の固定 (Festlegung von Preisen)

(m) 最低賃金 (Mindestlöhne)

(n) 補助金 (Subventionen)

である。Vgl. Boehlke (1961, 76f). ただし、これは一つの例であって、レプケの施策の可能性はこのカタログに厳密に限られたものではない。たとえば、レプケは、景気政策において、呼び水政策といわれる景気の底における公共投資や信用拡張、また景気の過熱を抑える投資抑制、増税、国家支出削減、割引率引き上げ、公開市場操作を「整合的」とであると認めている。Vgl. Röpke (1944/1979, 351; 355ff). また、構造政策もこのカタログを大きく越え出るものである。

122) Vgl. Röpke (1944/1979, S78f).

123) Röpke (1944/1979, 79).

124) Röpke (1944/1979, 80).

125) Röpke (1944/1979, 81).

soziologischer Rahmen)¹²⁶⁾を形成するための政策なのである。既に述べたように、レプケの秩序政策構想の最大の特徴となるのがこの総合社会政策であり、これについては節を改めてより詳細に検討しよう。

4.2 秩序政策構想の不可欠な支柱としての総合社会政策

レプケにおいては、「総合社会政策」が必要不可欠な要素として構想に加えられざるを得ない。この点が社会学的新自由主義としての彼の最大の特徴である。では、なぜそれは不可欠であるのか。それについては、いくつかの観点が存在しよう。

既に見たように、レプケにおいては、市場経済はすべてではなく、それはより高次の全体秩序に埋め込まれなければならない。市場は社会生活の限られた領域にすぎず、それはより包括的な「社会的・人間学的枠組み」に囲まれているのである。レプケによれば、両者はそもそもの基礎に置かれる原則が異なっている。「市場経済的中核における個人原則 (Individualprinzip)」に対して、「枠組みにおける社会原則ならびに人間性原則 (Sozial- und Humanitätsprinzip)」が立てられるのである。市場経済的な個人原則は、社会全体においては限られた領域において有効であるにすぎない。それが自己の領域を超えて影響を及ぼすならば、その「腐敗毒素が社会の全領域を害」¹²⁷⁾しかねないのである。レプケの社会危機の分析において、最も本質的な現象とされたのが「マス化」であったが、このマス化は、一面においては、社会における個人原則の貫徹であったともいえるだろう。こう考えると、市場経済には、それ相応の領域にとどまるようにしっかりとした囲いを設ける必要がある。つまり、「市場経済はそれ自体の分野の外では何の権力も持つてはならない。しかしそれ自身の分野ではどんなに権力を持っても多すぎるといふことはありえない」¹²⁸⁾のである。社会危機を克服するためには、社会における社会原則あるいは人間性原則が取り戻されなければならない。だが、その一方で、市場においてはあくまで個人原則が保持されなければならないのは言うまでもない。つまり、この異なる原則からなる二つの領域は区別して考えなければならない。「そのときにのみどちらの領域もともに救われうる」¹²⁹⁾のである。

他方また、この二つの原則は「均衡を保たなければならず、「互いに条件づけ合う」ものとして「密接な補完の関係」にある¹³⁰⁾。レプケによれば、自由な市場経済が有効に機能しなければ、社会の存立の基盤が崩壊すると同時に、健全な社会秩序が存在しなければ市場経済は維持されえない。したがって、総合社会政策は、間接的な形で市場経済の安定ならびに存立に寄与するものとなる。「市場経済そのものは、反対から支える総合社会政策 (widergelagerte Gesellschaftspolitik) が行なわれる場合にのみ維持され得る」のである。

126) Röpke (1944/1979, 83).

127) Röpke (1944/1979, 83).

128) Röpke (1944/1979, 84). 原文はバンジャマン・コンスタン (Benjamin Constant) の言葉をもじったフランス語であるため、訳文は本書訳書の該当箇所にしたがった。喜多村訳 (1954/1982, 65).

129) Röpke (1944/1979, 84).

130) Röpke (1944/1979, 83).

この二つの異なる原則が適用されるのは、彼の間人観からも理解されうるのであろう。既に見たように、レプケにおいて、人間とは人格として自律したいわば「個」の存在であると同時に、共同体へと埋め込まれなければならない、社会的存在であった。レプケにおいてはそもそもの人間存在の本質からしてこの二重性によって特徴付けられるのであり、それに対応して経済社会秩序に関しても人間のいずれの本性にも適合したものでなければ、「自然的秩序」でありえないといえよう。

こうして、レプケにおいては総合社会政策がその体系において極めて重要な位置に置かれる。では、それはどのようなものであるのか。既に見たように、レプケは、経済の「自然秩序」としての競争秩序に加えて、社会の「自然的秩序」を求めたが、この総合社会政策は、まさにその実現を目指すものといつてよいだろう。それを実現するために、まずもって目標とされるのは、レプケによる現代の社会危機の分析におけるその根本原因であったマス化とプロレタリア化の克服を目指す、「脱マス化」(Entmassung)と「脱プロレタリア化」である。脱プロレタリア化の政策として、レプケは「プロレタリアートのブルジョア化」(Verbürgerlichung des Proletariats)¹³¹⁾を主張する。すなわち、経済的ならびに社会的な意味での財産を再びプロレタリアに所有させることを促進することを求めるのである¹³²⁾。したがって、レプケにおいては広い意味で「財産形成政策」がその政策の中心を占めることになる¹³³⁾。この財産形成政策においては、道徳的説得や教育、あるいは優遇処置のようなさまざまな誘因を与えると同時に、他方で、過度の財産の集中を抑制し、財産の分散化を求める累進相続税のような租税政策が求められるが、とりわけここで重視されるのは、住宅政策である。生産的財産でもある労働者の持ち家の促進が、なにより自立性の基盤になりうるとしてレプケにおいては大きく推奨されるのである。と同時に、それは、家族という共同体の核が展開されるための基礎にもなり、脱マス化という側面からも大きな効果が期待されている¹³⁴⁾。

その一方で、レプケの目指した社会の自然的秩序の像からして、より積極的な目標として広い意味での分散化(Dezentralisation)が重要な課題となる。「あらゆる関係における中央集権化,集中,大都市ならびに大企業における人間の詰め込み(Pferchung),所有と権力の集積……から脱し,最も広く最も包括的な語義における分散化へと向かう」¹³⁵⁾ことを目指すのである。そのために重要な政策として挙げられるのが、国土計画(Landesplanung)である。大都市への集中を解消し

131) Röpke (1944/1979, S. 282).

132) レプケは、この課題を、カトリックの教皇回章「クワドラジェモ・アンノ」における「プロレタリアの救い」(redemptio proletariorum)を引きながら、極めて重視している。Vgl. Röpke (1944/1979, S. 265). レプケ自身はプロテスタントであり、カトリックではなかったが、カトリック社会論を高く評価し、そこから多くを学んでいた点は重要であろう。

133) レプケの財産形成政策については、Vgl. Röpke (1944/1979, SS. 279-284).

134) したがって、レプケの住宅政策は、リュストウのSiedlungspolitikの議論と同様の効果が期待されることがわかる。これについては、村上(2001b)を参照。

135) Röpke (1944/1979, 275f).

て地方への分散を推し進め、新たな比較的小規模の中核都市を作るとともに、農業と工業のバランスの取れた配置を目指し、それによって農村における共同体の展開の基礎を築こうとする、「正しい人間学的ならびに社会学的観点からの国土計画」¹³⁶⁾が推し進められることが、また脱マス化、脱プロレタリア化にとって重要な基盤を提供するとレプケは考えるのである¹³⁷⁾。

このような総合社会政策上の取り組みが展開される一方で、いわゆる社会保障政策については、レプケは消極的な態度をとる。とりわけ、ベヴァリジ構想に始まる「福祉国家」構想に対しては厳しい批判が加えられる¹³⁸⁾。レプケによれば、社会保障政策は、マス化、プロレタリア化を根本的に克服しようとする道ではなく、国家への依存傾向をますます強めることによって自律性にマイナスに作用するがゆえに、むしろプロレタリア化を進める処置であるというのである¹³⁹⁾。それゆえ、レプケはあくまでも財産形成などによる「脱プロレタリア化」こそが、まずもって中心に置かれる道であると強調する。しかしながら、多数のプロレタリアの「逼迫した扶助問題ならびに根無し草の問題」(Versorgungs- und Entwurzelungsprobleme)が存在し、「短期的な緩和政策」(kurzfristige Linderungspolitik)として、従来の社会政策が必要であることはレプケも容認している¹⁴⁰⁾。したがって、レプケにおいては、決して社会保障が拒否されるのではなく、あくまでも自助を基本にし、財産形成政策などで自律性の基盤を作ると同時に、補完的な役割として社会保障政策を取り入れる「社会政策的中道プログラム」(sozialpolitische Zwischenprogramm)¹⁴¹⁾が要求されているのである。

レプケが具体的に展開している総合社会政策は以上のようなものであるが、レプケは決して施策の可能性をこれだけに限っているわけではない。既に見たように、レプケはとりわけ現代の社会危機を「宗教的・精神的危機」としても捉えたが、それゆえ、精神的な共通の価値基盤を形成することも、この総合社会政策の目標の一つにはいるであろう。レプケはそうした共通の価値基盤を伝達する機関として「家族、教会、真の共同体、伝統」¹⁴²⁾を挙げるが、総合社会政策を通じてこれらを育成することによって、共通の価値基盤が保持されることが期待されるとともに、また道徳的説得も重要な要因になってくるといえよう。さらには、構造政策において取り上げられるさまざまな施策も、全体としては総合社会政策的課題に役立ち、また、競争秩序における安定的な経済秩序の存在もまた同様のことがいえる。そもそも、レプケにおけるプログラムの体系

136) Röpke (1944/1979, 290).

137) レプケの国土計画の構想については、Vgl. Röpke (1944/1979, 284-291).

138) Vgl. Röpke (1944/1979, 257-264).

139) Vgl. Röpke (1944/1979, 263). レプケは、国家の権限の配分原則として「補完性原則」を支持するが、この原則の観点からしても、レプケにおいては自助を優先しない形での普遍主義的な社会福祉は否定されると考えられる。Vgl. Röpke (1944/1979, S. 179).

140) Vgl. Röpke (1944/1979, 265). たとえば、レプケは「養老保険」(Altersversicherung)の道徳的意義を高く評価している。Vgl. Röpke (1944/1979, 272). この点は、補完性原則の積極的側面からの理解と考えられるが、レプケはそれについて具体的に述べていない。

141) Röpke (1944/1979, 271).

142) Röpke (1958/1979, 182).

自体が、目的による分類を含んでおり、それゆえ手段としては、総合社会政策と構造政策との間では多くの部分が重複すると言ってよい¹⁴³⁾。

レプケ自身が断りを入れているように、レプケの秩序政策構想は、決してそれによって社会危機が完全に克服されるような完結したプログラムを出そうとしているものではない。そもそも、レプケは「専売特許の解決策」(Patentlösungen)や「経済的救済論」(wirtschaftliche Erlösungslehre)¹⁴⁴⁾について強く戒めている。現代の社会危機は極めて深刻な問題なのであり、したがって、さまざまな努力を重ねる中で長期的な課題として絶えず取り組んでいかなければならないものなのである。

IV. 結びに代えて

レプケは包括的な社会危機の診断を通して、独特の秩序政策構想を展開した。その構想の理念となった「経済ヒューマニズム」は、彼の体系において根本的な意義を持っている。この経済ヒューマニズムの理念は、他の社会学的な新自由主義の論者、リュストウとミュラー＝アルマックにも大きな影響を与えており、とりわけ、ミュラー＝アルマックは、レプケの理念を明確に取り入れ、「社会的ヒューマニズム」(Sozialhumanismus)を掲げて、自己の「社会的市場経済」構想の基礎に据えている¹⁴⁵⁾。

本稿で確認したように、レプケは、自己の体系の基礎にキリスト教的な人間観、社会観を据え、それをもとにして経済学者として経済社会構想を展開している。こうした点から、キリスト教的経済倫理学者としてレプケを再評価しようとする論者も多い¹⁴⁶⁾。だが、レプケの構想はキリスト教社会論と完全に一致するわけではなく、とりわけ、カトリック社会論の側から、「新自由主義」としてのレプケの議論に対する批判もなされている¹⁴⁷⁾。たとえば、レプケの「市場整合性」の原則は、諸秩序を対等に位置付けるよりもむしろ、経済秩序の社会秩序に対する優位であるとして批判され、また、レプケの社会問題の解釈における「幸福主義的・心理学的基礎付け」に対して、個人の幸福の主観的・感覚主義的な解釈に唯名論的な傾向があるとして批判が加えられている¹⁴⁸⁾。こうした批判の妥当性も含めて、レプケの構想とキリスト教社会論との関係についてのさ

143) この点については、平田(1995)を参照。なお、平田は、構造政策をその手段の性質から社会政策に含めている。

144) Röpke (1944/1979, 319).

145) Vgl. Müller-Armack (1949/1981, 276ff). またリュストウにかんしても、彼の生誕百周年を記念する論集の副題が「リュストウの精神における経済的ヒューマニズム」であることは注目すべきであろう。Vgl. Bossel (1987).

146) たとえば、Tuchtfeldt (1979), Gutmann (1998), Boarman (1999), Ockenfels (1999)がある。

147) オッケンフェルスによれば、カトリック社会論の側からも、多くの論者においてレプケのキリスト教的背景について肯定的な評価がなされている。が、強い批判を向けるものとしてナヴロートを挙げている。Vgl. Ockenfels (1999 53). ナヴロートの議論については、Vgl. Nawroth (1961).

148) Vgl. Becker (1965, 172-174; 190-193).

らなる検討が必要であろう。

さらに、ミュラー＝アルマックも指摘しているように¹⁴⁹⁾、決してレプケの総合社会政策において議論は尽くされているわけではなく、彼の基本的立場を承認した上でも、なおも多くの政策の可能性が残されているだろう。したがって、総合社会政策の現代的な展開が必要不可欠である。たとえば、近年次第に展開されるようになってきている、地域コミュニティの再生へ向けてのさまざまな動きや、自助集団の促進政策といった新たな動きは、レプケの体系と決して矛盾するものではないように思われる。むしろ、こうしたさまざまな共同体の再生こそ、まさにレプケの要請したところであり、そのような福祉国家に代わる構想として注目されるいわゆる「福祉社会」構想¹⁵⁰⁾への動きは、福祉国家に厳しい批判を加えていた、レプケの構想の現代的な形でのさらなる展開とみなすことも決して不可能ではないだろう。

最後に、レプケのマス化、プロレタリア化の批判もまた、現代社会に対してなおも鋭い批判を投げかけるものであろう。むしろ、以前にもまして、マス化、プロレタリア化の進行は加速していると言っても過言ではない。とすれば、改めて新たな秩序政策構想が求められている現代において、単なる経済秩序構想だけではなく、社会の本質的な危機に目を向けたより根本的な構想が展開される必要があるのではないか。そのとき、レプケの構想は、依然として大きな示唆を与えるものであろう。

参考文献

- Becker, Helmut Paul (1965), *Die sozial Frage im Neoliberalismus. Analyse und Kritik*. Heidelberg/Löwen.
- Boarman, Patrick. M. (1999), Apostel of Humane Economie - Remembering Wilhelm Röpke. in: *ORDO* Bd. 50.
- Boehlke, Reinhard (1961), *Der Neoliberalismus und die Gestaltung der Wirtschaftsverfassung der Bundesrepublik Deutschland*. Berlin.
- Bossel, Lothar (Hg.) (1987), *Perspektive 2000. Der ökonomische Humanismus im Geiste Alexander Rüstows*. Würzburg.
- Eucken, Walter (1940/1989), *Die Grundlagen der Nationalökonomie*, 9. Aufl., Berlin/New York.
- Gutmann, Gernot (1998), Ideengeschichtliche Wurzeln der Konzeption der Sozialen Marktwirtschaft. in: Cassel (Hrsg.) (1998), *50Jahren Soziale Marktwirtschaft. Schriften zu Ordnungsfragen der Wirtschaft*, Bd. 57. Stuttgart.
- Hartwell, R. M (1955), *A Historie of Mont Pelerin Society*, Indianapolis.
- Haselbach, Dieter (1991), *Autoritäre Liberalismus und Soziale Marktwirtschaft. Gesellschaft und Politik im Ordoliberalismus*. Baden-Baden.
- Hotze, Andrea (2008), *Menschenbild und Ordnung der Sozialen Marktwirtschaft. A. Rüstow, W. Röpke, A. Müller-Armack und ihre Konzeption einer Wirtschafts- und Gesellschaftsordnung nach dem „Maß des Menschen“*, Hamburg.
- Hunold, Arbart (1964), Ein Leben im Kampf um Würde und Freiheit des Menschen. in: Röpke, Wilhelm (1964),

149) Vgl. Müller-Armack (1950, 265f).

150) 福祉社会構想については、足立編 (2013) において体系的に論じられている。

- Wort und Wirkung*. Ludwigsburg.
- Müller-Armack, Alfred (1948), Das Jahrhundert ohne Gott, in: Müller-Armack, Alfred (1981), *Religion und Wirtschaft. Geistgeschichtliche Hintergründe unsrer europäischen Lebensform*, Dritte, unveränderte Auflage, Bern/Stuttgart.
- Müller-Armack, Alfred (1949/1981), *Diagnose unserer Gegenwart. Zur Bestimmung unseres geistesgeschichtlichen Standorts*. Zweite Aufl., Bern/Stuttgart.
- Müller-Armack, Alfred (1950), Deutung unserer gesellschaftlichen Lage. Zu Wilhelm Röpkes Trilogie, in: *ORDO*, Bd. 3.
- Müller-Armack, Alfred (1971), *Auf dem Weg nach Europa. Erinnerungen und Ausblicke*, Tübingen
- Nawroth, Egon Edger (1961): *Die Sozial- und Wirtschaftsphilosophie des Neoliberalismus*. Sammlung Politeia. Bd. 14. Heidelberg/Löwen.
- Nell-Breuning, Oswald von (1953): Gemeinsames und Trennendes in den Hauptrichtungen der Wirtschaftswissenschaft und Wirtschaftspolitik. in: Kosiol, Erich/Paulsen, Andreas (Hg.) (1953) *Grundsatzfragen der Wirtschaftsordnung*, Berlin
- Ockenfels, Wolfgang (1999): Wilhelm Röpke als christlicher Wirtschaftsethiker. in: *ORDO*, Bd. 50.
- Oppenheimer, Franz (1933), *Der dritte Weg*, Potsdam.
- Ortega y Gasset, Jose (1952), *Der Aufstand der Massen*, Stuttgart.
- Röpke, Wilhelm (1932/1963), *Krise und Konjunktur*, Leipzig (auf Englisch: *Crises and Cycles*, London) (有井治訳 (1944)『経済恐慌と景気変動』実業之日本社)
- Röpke, Wilhelm (1933), Epochenwende?, in: Röpke, Wilhelm (1962), *Wirrnis und Wahrheit*, Erlenbach-Zürich/Stuttgart.
- Röpke, Wilhelm (1937/1979), *Die Lehre von der Wirtschaft*, 12. Aufl. Bern/Stuttgart (西村光夫訳 (1974)『自由社会の経済学』日本経済評論社).
- Röpke, Wilhelm (1942/1979), *Gesellschaftskrisis der Gegenwart*. 6. Aufl. Bern/Stuttgart
- Röpke, Wilhelm (1944/1979), *Civitas Humana, Grundfragen der Gesellschafts- und Wirtschaftsreform*, 6. Aufl. Bern/Stuttgart (喜多村浩訳 (1954/1982)『ヒューマンイズムの経済学』勁草書房).
- Röpke, Wilhelm (1947), *Das Kulturideal des Liberalismus*, Frankfurt (喜多村浩訳 (1949)『現代経済の危機』青也書店所収).
- Röpke, Wilhelm (1948), Die natürliche Ordnung. Die neue Phase der wirtschaftspolitischen Diskussion. in: *Kyklos*. Bd. 2.
- Röpke, Wilhelm (1950/1964), *Maß und Mitte*. Erlenbach-Zürich.
- Röpke, Wilhelm (1955), Alexander Rüstow. Zum 8. April 1955, in: Eisermann, Gottfried (Hg.) (1955), *Wirtschaft und Kultursystem*, Erlenbach-Zürich/Stuttgart.
- Röpke, Wilhelm (1957a), Die Massengesellschaft und ihre Probleme, in: Hunold, Albert (Hg.) (1957), *Masse und Demokratie*, Erlenbach-Zürich/Stuttgart.
- Röpke, Wilhelm (1957b), Marktwirtschaft ist nicht genug, in: Röpke, Wilhelm (1964), *Wort und Wirkung*, Ludwigsburg.
- Röpke, Wilhelm (1958/1979), *Jenseits von Angebot und Nachfrage*, 5. Aufl., Bern/Stuttgart
- Röpke, Wilhelm (1959a), *Gegen die Brandung*, 2. Aufl., Erlenbach-Zürich/Stuttgart.
- Röpke, Wilhelm (1959b), Wesen und Wandel der Gesellschaft, in: Röpke, Wilhelm (1964), *Wort und Wirkung*, Ludwigsburg.

W. レプケの秩序政策構想

- Röpke, Wilhelm (1960), *Wirtschaft und Moral*. in: Röpke, Wilhelm (1964), *Wort und Wirkung*, Ludwigsburg.
- Röpke, Wilhelm (1962a), *Wirmis und Wahrheit*, Erlenbach-Zürich/Stuttgart
- Röpke, Wilhelm (1962b), Die Enzyklika Mater et Magistra 《in marktwirtschaftlicher Sicht. in: Röpke, Wilhelm (1964), *Wort und Wirkung*, Ludwigsburg.
- Röpke, Wilhelm (1964), *Wort und Wirkung*, Ludwigsburg.
- Röpke, Eva (Hg.) (1976), *Wilhelm Röpke Briefe 1934–1966. Der innere Kompass*. Erlenbach-Zürich
- Rüstow, Alexander (1932), Diskussionsbeitrag, in: *Schriften des Vereins für Socialpolitik*, Bd. 157.
- Rüstow, Alexander (1963), Die staatspolitischen Voraussetzungen des wirtschaftspolitischen Liberalismus. in: Rüstow, Alexander. (1963), *Rede und Antwort*. Ludwigsburg.
- Rüstow, Alexander (1950a), *Das Versagen des Wirtschaftsliberalismus*, 2. Aufl., Godesberg.
- Rüstow, Alexander (1950b), *Ortsbestimmung der Gegenwart*. Bd. I. Erlenbach-Zürich, Stuttgart.
- Schmölders, Günter (1971), Ludwig Erhard und die Mont Pelerin Society, in: Schröder, Gerhard/Müller-Armack, Alfred (Hg.), *Ludwig Erhard. Beiträge zu seiner politischen Biographie. Festschrift zum fünfundsiebzigsten Geburtstag*, Frankfurt.
- Starbatty, Joachim (1988), Ordoliberalismus. in: Issing, Otmar (Hg.) (1988), *Geschichte der Nationalökonomie*, München.
- Tuchtfeldt, Egon (1979), Jenseits von Angebot und Nachfrage. in: Ludwig-Erhard-Stiftung (Hg.), *Symposion IV. Wilhelm Röpke. Beiträge zu seinem Leben und Werk*, Stuttgart.
- Quaas, Friedrun (2000), *Soziale Marktwirtschaft. Wirklichkeit und Verfremdung eines Konzepts*, Bern/Stuttgart/Wien.
- Weber, Alfred (1953), *Der dritte oder vierte Mensch. Von Sinn des geschichtlichen Daseins*, München.
- 足立正樹編 (2013) 『現代の経済社会と福祉社会の展望』高菅出版。
- 河合俊三 (1974) 「レプケ追想」, 西村光夫訳 (1974) 『自由社会の経済学』日本経済評論社。
- 古賀勝次郎 (1983) 『ハイエクと新自由主義』, 行人社。
- 鉢野正樹 (1989) 『現代ドイツ経済思想の源流』, 文眞堂。
- 平田謙輔 (1994) 「W. レプケの経済体制思想—市場経済の精神的・社会的基礎付け—」『六甲台論集』第41巻第3号。
- 平田謙輔 (1995) 「W. レプケの経済・社会政策論」『六甲台論集』第42巻第2号
- 福田敏浩 (2000) 「社会的市場経済の理論的源流—ヴィルヘルム・レプケの経済ヒューマニズム—」『彦根論叢』。
- 福田敏浩 (2010) 『第三の道の経済思想』晃洋書房。
- 藤本建夫 (2008) 『ドイツ新自由主義経済学の生誕—レプケと第三の道』ミネルヴァ書房。
- 野尻武敏 (1983) 『人間社会の基礎』, 晃洋書房。
- 村上寿来 (1998) 『秩序理論の展開に関する一考察—W. オイケンと Ph. ヘルダー—ドルナイヒの所説を中心に—』, 神戸大学修士論文。
- 村上寿来 (2001a) 「ミューラー=アルマックの社会的市場経済構想—その背後におかれた問題意識について—」『経済社会学会年報』23。
- 村上寿来 (2001b) 「A. リュストウの秩序政策構想—Vitalpolitikを中心に—」『六甲大論集』第48巻第3号。
- 村上寿来 (2013) 「経済社会体制と政策思想」足立正樹編『現代の経済社会と福祉社会の展望』高菅出版。